
2日間の妄想クリスマス

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2日間の妄想クリスマス

【Nコード】

N0482Z

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

あのとき、僕は何を考えていたんだろう。

思い出すのは彼女の柔らかい唇、雪のように綺麗な手。それもだんだん現実味がなくなってきてしまった。彼女がいなくなってから僕はずっと彼女を追い続けていた。姿形ないものを

夏の作家（自称）、まなつかが贈る冬のちよつと儂いクリスマスラブストーリー。聖夜に起こる、一つの奇跡。人間の極限までの

愛を題材にしました。

01話「序章」(前書き)

最初はかなり暗いですが、読み進めていくにつれて明るくなるはず。

01話「序章」

あるとき、僕は何を考えていたんだろう。

思い出すのは彼女の柔らかい唇、雪のように綺麗な手。それもだんだん現実味がなくなってきたってしまった。彼女がいなくなってから僕はずっと彼女を追い続けていた。姿形ないものを

+ * +

2011年12月24日

「寒い……い」

思わず口に出してしまう。それがまた空しさを増した。一年前のこの日も寒かった。同じようなことを口にしたと思う。彼女は笑って「そうだね」とだけ言っつてその華奢な身を寄せてきた。僕はそれに応えるように腕を回した。

僕は筆記用具などの事務用品を作っている会社に勤めている。入社して3年。もう会社にも慣れ、この毎朝の通勤ラッシュにも慣れた。慣れないのは彼女のいない生活だった。彼女の名前は空水七里。僕より一つ年下の後輩。僕が入社して一年後に同じ部署に入ってきた。初めて持つ後輩、僕は嬉しかった。仕事を教えるうちに仲は良くなり、一年半前ほどから付き合っていた。笑顔が可愛かった、ふとした仕草が可愛かった、声も可愛かった、何もかも、可愛かった。ただ彼女が雪だるまが翌日水たまりに変わっているようにある日、消えた。そう、消えた。行方不明。警察に依頼した。だけど見つからなかった。そして捜査は中断された。

いつもの席に着く。この会社で作った事務用の回転する椅子だ。背もたれにもたれるときしりと音を立てて傾く。隣をみた。

「矢田先輩、この関数ってどうやるんですってっけ？」

声が聞こえてくる。あの優しい柔らかな声だ。そう、彼女はいつも表計算ソフトの使い方僕に訊いてきたっけ。そう思っても空しさが余計に募るだけだった。

01話「序章」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

今回は毎年恒例！ クリスマス小説です。

去年はChristmas of the rainを発表しましたね。いまいちでしたが、今回は少し気合い入れて書いています。そしてクリスマスには完結する予定です。

最終話は作家らしくファミレスにわざわざ行って書く予定です。作家じゃないけど。

それではまた2話で会いましょう。

02話「七里との再会」

一日の仕事を終えてわざわざ隣の大きな駅前へと向かった。その駅前には大きなクリスマスツリーがあり、きらきらと輝きながら僕を見下ろしていた。

去年は一緒に見ていた。握りあった手。絡めた指。すべてこの手の中にあった。

「来年も一緒にこようね」

そういつていた。

「来てないじゃないか……」

ぐっと目をつぶった。奥から熱いものがこみ上げてくる。そして脳裏にあのときの記憶が甦って

「遅かったですね、矢田先輩」

「……っ!？」

伏せていた顔を上げる。聞き慣れた声、柔らかな口調。それは間違いなく

「七里!」

「……えへへ、お久しぶりですね」

「嘘だろ……」

彼女は白いコートに身を包んでニコニコ笑って立っていた。

「心配かけてごめんなさい」

「う、ごめんなさいじゃないよ!」

僕は嬉しさのあまり笑いながら彼女に歩み寄った。大声を上げたので周りから視線が浴びせられる。それはどこか哀れなものを見るような目に見えた。だけどそんなこといいじゃないか、僕の元へ七里は戻ってきたのだから。

いや、待て。七里はもういないはずじゃ……。

一気に心が冷える。僕はいったい何をしているのだろうか。目の前のは何だ。七里だ。七里だけど七里じゃない。

やばい。

「す、すいません！」

近くのサラリーマンを呼び止める。

「どうした」

彼は疲れた力のない目でこちらを見た。

「彼女が見えますか？」

「彼女？ どこに？」

「ここです！」

僕は七里のいる場所を指さす。彼女はそこにいる。それなのにサラリーマンは首を傾げ「疲れてるんだよ、帰って休め」とだけ言うところかへ言ってしまった。

なんなんだよ。本当に。

02話「七里との再会」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

本当はこのタイトル「2日間の幻想」だったんですけど、やっぱり若者にはこれかな〜と思い、こうしました。

すると友人に「気持ち悪っ!」って言われました。ひどい。

さて、それではこのへんで。

第03話「冬に咲いた、僕のタンポポ」

「……だから見えないんですよ、他の人には」

彼女はわずかに微笑みながらうつむいたままそうつぶやく。その声は雪のように儚く、煉瓦のタイルに吸い込まれて消えてしまった。「いつまでこうしてられるんだ」

僕はさすがのような思いを奥歯ですりつぶしながらやっと言葉を吐いた。

場所も変えた。人通りが少ない公園のベンチ。誰もいない、夜の8時。

「今日と明日です。そうしたらもう」

「……そっか」

ため息をつく。白い息が煙草を吹かしたように一直線にできて、消える。

「じゃあ」

僕は立ち上がり、座っている彼女に手を差し伸べた。

「遊ぼう、二人で。残された時間はあまりないんだろ？ ほら、早く」

彼女は一瞬驚いた表情を見せたがすぐにタンポポのような笑顔を咲かせて立ち上がった。

「行きましょー！」

「どこに行きたい？」

「んー、とりあえず夕食が食べたいです。……あ、もちろんレストランではまずいのであなたの家で」

「よっしゃ、じゃあ何か買って帰ろう！」

そっと公園を抜け出した。僕らはしっかりと手をつないでいた。

七里がどこか行ってしまわないように必死だった。

第03話「冬に咲いた、僕のタンポポ」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

いや、寒くなりましたね。風邪を引いたりしていませんか？
手洗いうがいをしっかりしましょうね。

日々平和のホームページが微妙に更新されています。

今日は写真をアップしたのでご覧になる方は活動報告のページ、またはプロフィールのところアドレスがありますのでそこから飛んでください。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0482z/>

2日間の妄想クリスマス

2011年12月7日06時48分発行